

八幡公はちまんこう

頼山陽らいさんやう

山陽さんやう

結髪軍けつぱつぐんに従したがて弓箭雄きゅうせんゆうなり

八州はっしゅうの草木そうもく威風いふうを識しる

白旗動はつきうごうかず兵營へいえい静しずかなり

馬うまを辺城へんじょうに立てて乱鴻らんこうを看みる

【作者】頼山陽（一七八〇～一八三三年）（安永九年～天保三年）。江戸時代後期の儒者、詩人、歴史家。

詩集に『日本樂府』『山陽詩鈔』などがある。

【語釈】*結髪…髪をゆう。 *弓箭…弓矢。 *威風…威嚴のある犯しがたい様子。 *辺城…辺疆の城塞。 国境の城塞

*乱鴻…整然と列をなして飛ぶ雁が乱れ飛ぶさまのこと。 雁行の乱れ。

【通釈】成人の髪型に結つて以来（＝成人になつて以降）、軍に付き従つた武士のかしら（で）。関八州の草木は、（彼の）武威の風を知つていて（靡（なび）いている）（＝従っている）。白旗の軍勢（＝源氏の軍）は動ずることなく、静かであり。辺疆の城塞に馬を停めて雁の乱れ飛ぶさまを見ている。

【備考】◎作者が源義家の人となりとその武風をたたえて詠じた詩。（後三年の役で、源義家軍が家衡・武衡軍の籠もる金沢柵への行軍中、西沼の付近を通りかかると雁行の乱れがあり、八幡太郎・源義家が清原軍の待ち伏せを見破つた故事を謂う。）

◎関八州…江戸時代、関東八州（関東八ヶ国）の総称。相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野。